

21世紀COEプログラム 平成14年度採択拠点事業結果報告書

機 関 名	京都大学	学長名	尾池和夫	拠点番号	D10	
1. 申請分野	A<生命科学> B<化学・材料科学> C<情報・電気・電子> D<人文科学> E<学際・複合・新領域>					
2. 拠点のプログラム名称 (英訳名)	心の働きの総合的研究教育拠点 (Center of Excellence for Psychological Studies)					
研究分野及びキーワード	<研究分野:心理学>(注意・意識)(比較認知心理学)(生涯発達)(文化)(心理療法)					
3. 専攻等名	文学研究科行動文化学専攻、教育学研究科教育科学専攻／臨床教育学専攻、人間・環境学研究科共生人間学専攻、情報学研究科知能情報学専攻					
4. 事業推進担当者	計 25名					
氏 名 (英点リーダー)	所属部局(専攻等)・職名	現在の専門 学 位	役割分担 (事業実施期間中の拠点形成計画における分担事項)			
Fujita Kazuo 藤田 和生(53) Osaka Naoyuki 苧阪 直行(60) Sakurai Yoshio 櫻井 芳雄(54) Higashiyama Hirohisa 東山 紘久(64) Kawai Toshio 河合 俊雄(49) Kusumi Takashi 楠見 孝(47) Saito Satoru 斎藤 智(41) Saeki jun 齋木 潤(44) Funahashi Shintaro 船橋 新太郎(56) Ito Yoshiko 伊藤 良子(60) Yoshikawa Sakiko 吉川 左紀子(52) Kuwabara Tomoko 桑原 知子(51) Kadono Yoshihiro 角野 善宏(47) Ashida Hiroshi 蘆田 宏(39) kajii natsumi 梶井 夏美(36) Matsumura Mitikazu 松村 道一(57) Sugiman Toshio 杉万 俊夫(55) Naitou Eiichi 内藤 栄一(40) Watanabe Motoki 渡部 幹(39) Yamada Youko 山田 洋子(59) Koyasu Masuo 子安 増生(56) Itakura Syouzi 板倉 昭二(48) Kitayama Shinobu 北山 忍(50) Hasiya Kazuhide 橋彌 和秀(38) Yamanaka Yasuhiro 山中 康裕(65)	文学研究科(行動文化学専攻)・教授 文学研究科(行動文化学専攻)・教授 文学研究科(行動文化学専攻)・教授 教育学研究科(臨床教育学専攻)・教授 教育学研究科(臨床教育学専攻)・教授 教育学研究科(教育科学専攻)・助教授 教育学研究科(教育科学専攻)・助教授 人間・環境学研究科(共生人間学専攻)・助教授 人間・環境学研究科(共生人間学専攻)・教授 教育学研究科(臨床教育学専攻)・教授 教育学研究科(教育学専攻)・教授 教育学研究科(臨床教育学専攻)・助教授 教育学研究科(臨床教育学専攻)・助教授 文学研究科(行動文化学専攻)・助教授 文学研究科(行動文化学専攻)・助手 人間・環境学研究科(共生人間学専攻)・教授 人間・環境学研究科(共生人間学専攻)・教授 人間・環境学研究科(共生人間学専攻)・助手 人間・環境学研究科(共生人間学専攻)・助手 教育学研究科(教育科学専攻)・教授 教育学研究科(教育科学専攻)・教授 文学研究科(行動文化学専攻)・助教授 人間・環境学研究科(共生人間学専攻)・助教授 教育学研究科(教育科学専攻)・助手 教育学研究科(臨床教育学専攻)・教授	比較認知科学 京大理博 知覚心理学 京大文博 認知神経科学 富山医薬大医博 臨床心理学 京大数博 心理臨床学 チューリッヒ大Ph.D. 認知心理学 学習院大博 認知心理学 京大教博 認知科学 UCLA Ph.D. 認知神経科学 京大理博 臨床心理実践学 京大教博 認知心理学 京大教博 心理臨床学 京大教博 臨床心理実践学 神戸大学医博 認知心理学 京大文博 認知心理学 京大文博 認知神経科学 京大理博 社会心理学 阪大学術博 神経科学 京大人環博 社会心理学 北大文修 生涯発達心理学 名大教博 発達心理学 京大教博 発達認知科学 京大理博 文化心理学 ミシガン大Ph.D. 比較発達科学 京大理博 心理臨床学 名市大医博	全体総括、「イメージと表象の性質と機能」「進化と生涯発達」担当 「イメージと表象の性質と機能」に関する課題総括 「イメージと表象の性質と機能」担当 「イメージと表象の性質と機能」「文化・社会的環境との相互作用」担当平成17年3月31日退職のため辞退 「イメージと表象の性質と機能」「身体化される心」担当 「イメージと表象の性質と機能」「身体化される心」担当 「イメージと表象の性質と機能」担当 「イメージと表象の性質と機能」担当 「イメージと表象の性質と機能」「身体化される心」担当 「身体化される心」に関する課題統括「イメージと表象の性質と機能」担当 「身体化される心」「文化・社会的環境との相互作用」担当 「身体化される心」「文化・社会的環境との相互作用」担当 「身体化される心」「文化・社会的環境との相互作用」担当平成17年4月1日より 「身体化される心」担当 「身体化される心」担当平成15年3月31日退職による辞退 「身体化される心」担当 「文化・社会的環境との相互作用」に関する課題統括 平成15年4月1日より参加 「身体化される心」担当平成18年3月31日退職による辞退 「文化・社会的環境との相互作用」担当 「進化と生涯発達」に関する課題統括 「文化・社会的環境との相互作用」担当 「進化と生涯発達」担当 「進化と生涯発達」「身体化される心」担当 「文化・社会的環境との相互作用」に関する課題統括 平成15年8月31日退職による辞退 「進化と生涯発達」担当平成15年3月31日退職による辞退 「身体化される心」担当平成17年3月31日退職による辞退			
5. 交付経費(単位:千円)千円未満は切り捨てる () : 間接経費						
年 度(平成)	14	15	16	17	18	合 計
交付金額(千円)	182,000	135,000	108,300	99,000 (9,900)	91,620 (9,162)	615,920

6．拠点形成の目的

グローバル化や少子高齢化など、未曾有の事態が急速に到来している。物質文明の進歩が人間の幸福に直結しないことも明確になり、未来の予測が困難な中、人々の心は乱れ、さまざまな社会的問題を生んでいる。このような時代にあって心理学の責務は大きい。この緊急かつ重要な責務を果たすべく、我々は、実験科学、フィールド科学、臨床実践科学の連携により、融合科学としての心理学を志向し、新たな知の方法論を切り拓くとともに、未来を展望できる21世紀の人間観を創出し、それらを国際社会に向けて具体的に発信する。

京都大学の心理学は、認知研究、発達研究、比較認知、社会心理、脳科学、心理臨床等の広い分野において、本邦における牽引車として、群を抜く研究・教育業績を挙げてきた。国際的学術誌への論文掲載、学術書の出版、後進の着実な育成の他、多数の国際共同研究が継続的に実施されており、その活動は国内外に高い評価を得ている。

こうした優れた要素に加え、我々は、30年以上の歴史を持つ心理学教官連絡会という月例の会合を通じて情報を交換し、心的諸機能の基礎研究から年間5800件を越える心理相談を行っている臨床実践に至るまで、多様な心理学領域を専門とする40名近い研究者が、学術交流を深めてきた。教育面でも、多くの講義を共通科目に指定し、学部生や大学院生が部局超越的な指導を受けられる体制を作ってきた。本計画において、我々はこの伝統を飛躍的に発展させ、多数の研究科に分散している関連講座を束ね、仮想的な研究科のように機能する連合組織 - 心理学連合 - を構想した。

並ぶもののないほど多様な教育・研究環境のもとで、研究を収斂させるため、我々は「心を知り、心をはぐくむ」という共通テーマを設定し、今後5年間に取り組むべき共通の問題空間（図1）を設定した。実験から臨床に渡る多様なアプローチにより、相互に連携しつつこの問題空間における研究を推進し、国際的学術論文や書籍の公刊、国際シンポジウム、研究者や大学院生の相互国際交流などを通じ、心理学の世界的研究拠点として、我々はその成果を発信する。またその成果を踏まえた臨床実践活動を通じて、広く社会に資する貢献を目指す。社会学、精神医学などの隣接領域との相互作用から、より総合的な人間学への道をも探る。

設定した問題空間は、3つの下位空間から成る。

1．自然的現実との相互作用：心の基礎的構成要素はどのような生物学的起源をもち、システムとして統合されているのか（図1右） 心の生物学的基盤に関わる

問いの総体。生物としての人は物理的環境と人的環境に取り巻かれている。これら環境内の事物の認識、他者や集団、文化との関わりなどがこの問いに含まれる。これら諸過程を決定する環境的・個体的要因を同定し、その相互関係を明らかにすることが中心課題である。

2．社会的現実との相互作用：人の心は他者との関係においていかに生成され、社会的現実の中でどのような在り方をするのか（図1左） 他者の中に生まれる人は、常に変化する文化・社会・歴史的環境の中に生きており、それに対応するよう求められる。その対応様式の解明や、制度や規範といった社会的現実に対応しきれない場合に生じる問題とその対処法のみならず、人が現実社会に働きかけていく心の過程についても、心理臨床実践からの知見を基盤にして検討する。

3．内的現実との相互作用：自らの営みを再帰的に反省する自己理解の様相と働きは何か（図1中央） 自己モニタリング機能、自己意識に関わる問いの総体である。自己は自身の内部に存在する第3の環境ともいふべきものであり、人は常にそれを生みだし、またそれと相互作用しつつ行動を決定している。人の最大の特徴とも言えるこの自己との相互作用はいかにして形成されるのか、実際にいかに機能しているのか。これらを明らかにすることがこの問いの中心課題である。

これら3つの心的機能は、必然的に時間を追って変容してゆく。経験による短期的変化から、数十億年に及ぶ生命の進化史に至る、異なる時間尺度における発生過程の理解なくしては、動的変容を遂げる個体や民族、さらには種の心の性質を正しく理解することはできない。また、あらゆる心的機能は、その神経系によって実現される。したがって、これを実現する脳機能の解明も必然的に重要課題として位置づけられる。

このように、心が投げかける問題は多様でかつ複雑である。この広大な問題空間の総体を、我々は「心の宇宙」と名づけ、この空間内に個々の研究課題を位置づけることにより、心の総合的理解を目指す。

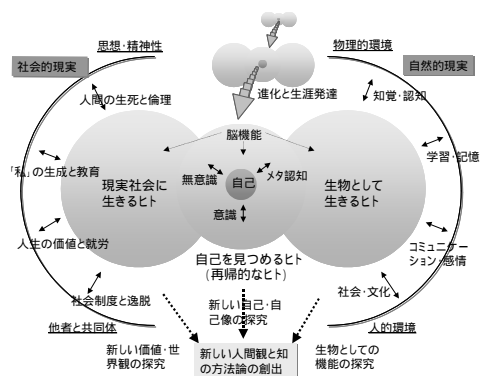


図1．問題空間「心の宇宙」

7. 研究実施計画

上記3下位問題空間それぞれに以下の4研究課題を位置づけ、個々の課題の推進と、それらの相互関連性の解明を通じて、心の働きの総合的理解を目指す。

課題A「イメージと表象の性質と機能」(苧阪他9名)

心の内部に構成されるイメージや表象は、環境や社会や自己の認識の基盤を提供する。また社会・文化的に構成されたイメージや表象は、人の思考や感情を方向づけ、行動を組織する。人は内的自己と表象とを対話させ、それにより過去の経験を反芻し、現在の行動を決定し、将来の行動を計画する。心を制御する最大の要因である表象やイメージは、いかにして形成され、いかなる性質を持ち、いかに機能するのか、またはそれは脳内でいかに実現されているのか。これらは心の基礎的機能を理解する上でもっとも重要な課題である。

課題B「身体化される心」(伊藤他10名)

心の諸機能はすべて身体において実現されている。身体を離れて心は形成されず存在し得ないという認識は、近年心を理解するための新たな枠組みとなりつつある。また主体の内部に構成された社会的身体と生物学的身体の整合性を保持することは、人が社会的存在として生きるための基礎を提供する。基礎的外界認識における心身の相互作用を実験心理学的に分析するとともに、身体疾患における心理的側面の解析、遺伝子治療、移植医療などに関わるカウンセリング等の実践から、医学や自然科学への提言につなげる示唆を得る。

課題C「文化・社会的環境との相互作用」(杉万他5名)

心というシステムは、人自らが歴史的に作り上げてきた環境の中で機能する。人を取り巻く環境は人が自身を社会の中に定位する枠組みを提供する。近年極めて基本的な認知にも、環境の影響が存在することが示されている。こういった深甚な社会や文化の影響は、いまだ十分に理解されているとは言えない。一方、社会的現実と向き合う主体にとっては、文化・社会的な環境とその急激な変化に対応できないことから、様々な心理的問題が生じてくる。臨床実践を通じて、このような問題の解決を探っていくことが急務である。

課題D「進化と生涯発達」(山田他4名)

あらゆる心の動きは時間軸に沿ってダイナミックに変化する。特定の心的機能に関するモデルは、その機能の時間的变化をも予測可能であるべきである。系統発生と個体発生の過程を、進化的比較、世代間比較、生涯発達比較等を通して明らかにする。臨床実践においても幼児期からの生育史やライフストーリーは問題行動の理解と治療に重要である。臨床実践と生涯発達

をアクティブに連結し、説得力のある社会政策や教育政策を提案する。心の発生過程を理解することなく、心の将来を正しく予測することはできない。

各年度の実施計画の概略は以下の通りである。

平成14年度 上記4研究課題ごとに、非常勤研究員等を含めた学際的・国際的な先端的研究グループを組織し、研究環境を整備し、予備的研究を開始する。医療機関や司法機関との間で研究員の派遣/招へいをおこなうとともに、合同事例研究会を開催し、連携への準備をすすめる。予備的研究成果に基づき、次年度以降に取り組む中心的テーマを明確化し、その研究計画の確立と調整をおこなう。試験的に数人の大学院生を海外の研究拠点に短期間派遣し、国際大学院生交流(項目8(教育実施計画)参照)のための環境を整備する。

平成15年度 前年度の成果をもとに、研究を発展させる。前年度に明確化されたテーマに焦点化して研究を推進し、研究成果の蓄積とその成果の公表(学術誌、国際学会等)に重点的に取り組む。医療/司法機関との連携を確立し、継続的協力関係を樹立する。国際大学院生交流を確立し、複数の海外研究拠点との継続的な研究協力を樹立する。研究成果の社会的還元としての叢書「心の宇宙」シリーズの出版準備をおこなう。

平成16年度 研究をさらに発展させる。中間評価で指摘を受けた、基礎系・臨床系の融合的研究を重点支援する。特に感情に関わる総合的研究-感情科学-の構築を目指す。海外との連携を強化し、教官、院生の相互派遣により、実質的な共同研究を進める。教育面では、大学院生国際交流事業(派遣/招へい)と競争的研究費(大学院生養成プログラム)により自由な研究を支援し、若手の育成に資する。叢書の出版を開始する。成果報告としての英文単行本を具体化する。

平成17年度 研究をさらに発展させる。融合的研究は引き続き強力に支援する。実践活動の面では、医療/司法機関との永続的な協力関係を通じて、これら社会的機関への具体的提言を探る。叢書の出版を継続する。英文単行本の出版を開始し、拠点形成事業前半の成果を世界に向けて発信する。

平成18年度 研究をさらに発展させるとともに、成果を総括し、その社会的還元に力を入れる。叢書「心の宇宙」シリーズの出版を継続する。本叢書は、国内の研究振興と一般の啓発を兼ねて、本事業終了後も継続して出版する。高度な学術的成果をとりまとめ、複数の英文単行本を全世界に向けて発信し、評価を得て、拠点としてのさらなる発展につなげる示唆を得たい。

8. 教育実施計画

以下の具体的な大学院教育に関する諸改革を実施し、次代の心理学を担う独創性に富む人材を育成する。

大学院教育に関する主たる施策は、研究活動を支援するカリキュラムの新規開設、研究指導の部局超越化、及び現在多部局に分散して実施されている大学院教育の統合とそれを支援する基礎教育の共通化である。共通科目の設定、心理学セミナー、国際セミナー等、その一部はすでに実施されているが、これを大規模な統合へと発展させる。これらを通じて、広い視野を持ち、基礎系心理学と臨床系心理学の双方を深く理解し、京都大学の独自性を持って世界最先端で活躍する人材を養成する。この教育システムにより、我々は、基礎と臨床が融合した心の総合的理解を、さらに確実なものへと進展させたい。なお、これらは、教官は個々の部局・講座に所属したままで実施されるヴァーチャルな心理学連合の新規教育活動であり、組織改編や教務事務処理の改変を伴うものではない。

1) 大学院生の研究活動に関わる施策

- a) 「心理学の最先端」セミナーの開設 定期的に、心理学連合所属の教官が自らの研究成果を報告し、教官及び大学院生が討論する場を設定する。独創性ある心理学研究の最先端に触れさせることにより、大学院生の動機づけを高め、報告と討論の成果を自らの研究に活かす機会を提供する。
- b) 国際大学院生交流の推進 特定の海外の研究拠点を定め、本心理学連合に在籍する大学院生と当該研究拠点の大学院生との相互留学制度を整備する。
- c) 国際心理学セミナーの定期開催 定期的に海外の一流研究者を招へいし、学外に開かれたセミナーを開催する。
- d) 心理学懇話会の定期開催 定期的に大学内外の関連研究者を招き、学外に開かれたセミナーを開催する。
- e) 部局間研究グループによる共同指導 先述の4つの研究テーマに携わる研究グループを組織し、それによる共同指導体制を作り、研究プロジェクトと教育プロジェクトの両方に資する。本指導の一環として下記2) a)の共通科目を開設する。
- f) 大学院生研究発表会の共同開催 年に1度あるいは2度、心理学連合所属の大学院生が研究発表をおこなう場を設け、多様な研究活動に直接触れる機会を与えると同時に、研究交流を促進し、広い視野を持つ発想豊かな人材の育成に資する。
- g) 指導教官交換性の実施 大学院生が希望すれば、心理学連合所属の教官から副指導教官を指定できるよう

にし、実質的な指導がおこなえるようにする。

h) アカデミックイングリッシュコースの開設 国際的発信能力を高めるためには、英語によるコミュニケーション能力が必須である。模擬国際会議の形態をとった研究発表及び討論演習をおこなう。

i) 臨床実践を支援するシステムの整備 臨床実践家を志向する大学院生を連携医療・司法・教育施設に派遣し、現場での教育・訓練をはかるとともに、連携機関から研究員を受け入れて、心理療法に関する訓練・研修を積ませる。

2) 講義・単位に関わる施策

- a) 大学院共通科目の新規開設 上記4つの研究テーマに対応する共通科目としての演習を開設する。本科目は、上記1) e)の共同指導の一環として実施する。
- b) 大学院単位完全互換性の実施 現在各部局において開講されている講義等の単位認定を、心理学連合内で完全に互換とし、大学院生により広い範囲の研究領域を学ぶ機会を提供する。
- c) 修士論文審査の共通化 修士論文審査の副査を心理学連合所属の教官から自由に選定する。
- d) 博士論文審査の共通化 博士論文審査の副査を心理学連合所属の教官から自由に選定する。

また大学院教育改革をより効果的にするため、学部学生教育に関しても以下のような改革を実施する。

- a) 講義等単位の完全互換性の導入 心理学連合に所属する教官が担当する講義等科目の単位を部局間で完全互換にし、学部学生に広範囲の知識を学ぶ機会を提供する。
- b) 心理学導入教育の実施 1回生向けに心理学の導入教育をおこなう科目を新規開設する。この科目は、少人数のゼミナール方式として、心理学連合に所属する教官が複数リレー方式で担当し、早期から多様な研究内容や教官に触れる機会を提供し、研究の面白さを理解させ、人材の育成に資する。
- c) 2回生向けの初級実験の共同実施 現在、心理学系の学部学生数は、文学部約15～20名、教育学部約30名、総合人間学部約15名である。これを4群にわけ、文学部、教育学部、総合人間学部、情報学研究科の4ヶ所を3～4週ずつ巡回する形で実施する。残りの週は学生が希望する部局において、特色ある実験をsemi-advancedコースとして受講させる。
- d) 卒業論文指導及び審査の部局超越化 卒業論文の実質的な指導を心理学連合に所属する教官が部局横断的におこなえるようにし、審査も心理学連合所属の教官が部局を超えて担当できるようにする。

9. 研究教育拠点形成活動実績

目的の達成状況

1) 世界最高水準の研究教育拠点形成計画全体の目的達成度

心の働きを総合的に解明し、基礎系・臨床系の融合による新たな学術的知見の創出と、多様な教育環境のもと、創造性豊かな若手研究者を育成するという本拠点の目的は高いレベルで達成された。後述のように、若手育成面での成果は特に著しく、自己評価は、想定以上の成果を挙げた、である。

研究面では、拠点全体の学術論文数は事業開始時に比べて倍増し(図1上段)、従前にもまして、高度な研究成果が次々と生産されるようになった。

国際交流面では、平成15年度に米国ミシガン大学と国際交流協定を締結し、共同研究を進めている。また18年度には、英国ランカスター大学との間で国際交流協定を締結し、欧州との共同研究体制をも確立した。

中間評価で指摘された基礎系・臨床系の融合強化策として、3)に例示する複数の課題を推進し成果を得た。また新たな研究領域として、感情に関する総合的研究の構築を目指し、「感情科学」と題した書籍の出版へと結びつけた(7月出版予定)。

18年12月に総括シンポジウムをおこない、成果を披露した。研究チーム等の発表の他、院生を中心とした100件を超えるポスター発表があり、本拠点の成果の多様さと高質さが示された。

18年10月に約800頁強の英文報告書をまとめ、これをもとに、外国人4名、日本人1名の著名研究者に外部評価を依頼した。全評価者から、本拠点はCenter of Excellenceと呼ぶにふさわしいという高い評価を得た。

2) 人材育成面

での成果と拠点形成への寄与

大学院生の研究活動面で顕著な成果が見られている。図1中段に見られるように、事業開始時に比べて院生の査読論文発表数は倍増し、学会発表数は約3倍に増加した。課程博士取得者は、5年間に71名を数え、着実に次代の心理学を担う人材が育成されている。

これは平成14年度から開始した大学院生交流経費(毎年約10名の派遣/招へい)による国際的研究活動機会の増加と15年度に創設大学院生養成プログラム(毎年約10名に与えられる競争的研究費)による研究環境の向上、多彩なシンポジウムやワークショップによる視野の広がり、ならびにこれらの総体が生み出した、互いに刺激し学び合うポジティブな競争と交流の大きな成果であると思われる。また、アカデミックイングリッシュコース(英語プレゼンテーション法演習)などの開講の成果により、この5年間に大学院生の「英語恐怖症」はほぼ霧消し、臆せず外国人と論議し、また積極的に海外の研究室に出向いて研究を実施してようになった。大学院生の国際化は著しい。

こうした大学院生の活性化は拠点全体の活動を飛躍的に高めたといえる。論文数の増加だけではなく、教員側の動機づけの高揚にもつながり、研究指導を質量ともに高め、よい循環が生み出された。

教育カリキュラムの面では、大学院生の教育環境の多様化と柔軟化を実現する一方、学部教育においても、16年度から心理学初級実習を共通化し、17年度からは1回生向けの共通科目・心理学概論を心理学連合提供科目として開講するなど、初等教育からの後継者育成環境を整備した。大学院生・学部学生の部局を超えた聴講は日常化し、共通化の効果が顕著に見られている。

3) 研究活動面での新たな分野の創成と、学術的知見等

多様な心の働きに関する数多くの新知見が得られた。以下にいくつかの特筆すべき成果を述べる。

課題Aに関しては、特に認知神経科学分野で種々の画期的成果が挙げられた。櫻井らは、記憶課題遂行中のサルやラットの脳内から近接した多数のニューロン活動を記録し、独立成分分析を応用した独自の方法で解析し、脳の情報表現と処理の単位がセル・アセンブリ(ニューロンの集合)であることを実証した。なおこの手法は特許申請中である。宇阪らは、高齢者の作業記憶の機能低下は、他の脳領域の活動によって補償されること、心の理論と作業記憶は前頭葉で共通の脳内基盤をもつことなど、作業記憶の脳内機構に関して多様な事実を明らかにした。船橋らは、空間位置に關

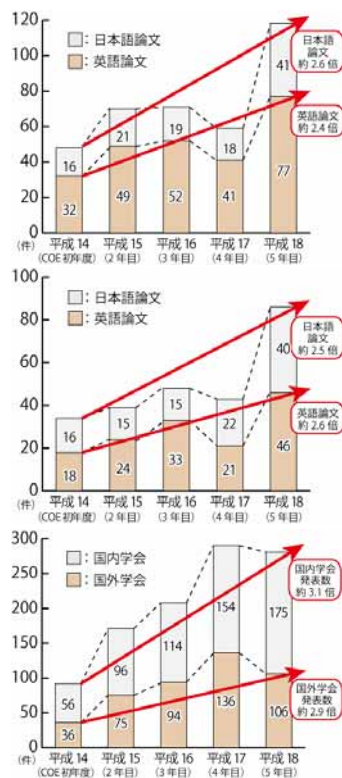


図1. 事業開始からの研究成果。上: 事業推進担当者の査読論文数、中: 大学院生(第1著者)の査読論文数、下: 大学院生(第1発表者)の学会発表数。

る作業記憶内容の変化を、前頭前野内のニューロンの方向選択性のダイナミックな変化として同定した。認知科学研究では、齋木らが、諸属性の組合せで定義される物体は、従来の知見と異なり、1個から2個しか視覚的短期記憶に正確に保持されないことを示した。

心身の相互作用を扱う課題Bでは、吉川らが表情認知に関する一連の検討をおこなった。自身が幸福、怒りの表情を意図的に作るにより同じ感情を含む表情の認知が促進されること、怒り・喜びなど接近行動を動機づける感情は、直視線で判断の促進がみられ、回避行動を動機づける恐怖・悲しみなどの感情は、視線の影響が異なることがわかった。角野は風景構成法により統合失調症の回復過程を分析した。通常、風景の整合性の確立により心理空間の再構成が見られるが、そうでない事例では、風景構成法では描かれない心理空間が存在し、その領域でも回復過程が観察できることがわかった。伊藤は、心が心理化・身体化・行動化・象徴化の4つの次元に現れることを心理療法の事例をもとに明らかにし、人間の特質としての象徴化を可能にする他者の機能の重要性を示した。

課題Cでは、渡部らが、資源分配方略の文化差について、最後通牒ゲームを用いた日米比較をおこなった。このゲームでは資源を渡された参加者Aが参加者Bに資源の分配を提案し、Bが受諾したときだけ両参加者は資源を手に入れることができる。その結果、平均して日本人は6割、米国人は5割程度を自分に分配するが、相手が善良だと分かっている条件では、このパターンが逆になることが分かった。杉万らは、バイオテクノロジーの社会的受容に関して、新聞記事分析、世論調査、政策立案過程の言説分析をおこない、本邦では、市民を疎外したまま、経済・企業の論理がメディアによって支持されており、政策立案過程では自己決定の本質的議論を欠いたまま自己決定の論理によってバイオテクノロジーが推進されつつあることを示した。

課題Dでは、進化と生涯発達という長い時間軸から、多様な心の機能を分析した。藤田らは、視知覚過程に関する広範な種比較研究をおこない、錯視や知覚的補間に見られる種差を明らかにした。心の研究は多様な心のすべてを標的に据えるべきだとする多様性心理学の視点を提案し、心の多様性の諸側面を論じた英文書籍(藤田・板倉編著、2006)をまとめた。また、新世界ザルの高次感情について分析した。協力行動場面では、即時的利益がなくとも彼らは将来を見越して協力できること、食物分配では弱者への思いやりとともとれる行動を示すことなどがわかり、高次感情の進化的起源は

古い可能性を示した。子安らは、学童における感情表示規則の発達を分析し、小学校高学年までに徐々にこの社会的ルールが学習されることを示した。板倉らは、ロボットなどの人工物と乳幼児との相互交渉を分析した。12～18ヶ月児が人に可能な動きを好み、同様の選好をロボットに対しても示すことがわかった。他方、就学前児は、ロボットに誤信念が理解できるとは判断しないことがわかった。山田らは、欧米の影響が根強い生涯発達心理学のモデルを、日本文化の視点から見直す理論的・方法論的研究を推進し、「生成的ライフサイクルモデル」「両行発達論」として、循環する時間の概念を理論的に明確にした。

特に推進した主要な融合的課題とその成果を述べる。

『共感的対話』における相互作用性に関する多角的研究 - 臨床心理学・認知心理学・社会心理学の立場から

心理臨床面接における共感的対話の構造を、社会心理学的・認知心理学的実験を用いて明らかにした。臨床対話を、そのマクロの時系列構造と、ミクロレベルの情報処理のダイナミクスという2観点から分析し、発話内・発話間の「間」や対話中の他者理解の性質に、臨床対話特有の構造があることを明らかにした。得られた知見はカウンセラー育成のための有効な指針を与えるのみならず、対話という相互行為一般の構造に関する新たな理論構築をもたらすと考えられる(桑原ら)。遺伝情報と意思決定に関する臨床心理学的・社会心理学的・認知心理学的研究

遺伝カウンセリングにおける心理臨床実践をふまえて、本研究では、大学生が直面しうる時系列的な仮想場面(診断、結婚、出産)を設定し、意思決定の認知・感情過程とその規定因、決定スタイルの個人差と支援ニーズを体系的に明らかにする調査を実施した。その結果、遺伝の作用による重い病気について、遺伝子検査受検希望は、自己の発症前には高いが出生前は低いこと、受検希望は決定困難や恐怖で抑制され、人生設計やリスクへの対処で促進されることなどがわかった。心理専門家に対して多様なニーズがあり、遺伝情報、同病者、心理的支援、悩みの理解、指導/助言等での支援が期待されていることがわかった(伊藤他)。

ADHDを克服する方策に関する研究

注意欠陥/多動性障害(ADHD)は、大きな社会問題であるにもかかわらず、基礎的研究や有効な行動改善方法に関する研究がほとんどおこなわれていない。発達心理学者、カウンセラー、医師、学校教員、ADHDの子をもつ親、注意機能研究者や神経科学者などが共同して、ADHD児やその家族のもつ問題点を整理する試みをおこ

なうとともに、マカクザルを対象に動物モデル作成を試みた。前頭連合野ドーパミン系の薬物破壊による行動量増加と、リタリンによるその緩和が示され、発達初期に前頭連合野で生じたドーパミン系の機能障害が ADHD の生物学的要因である可能性が示された(船橋他)。

上記成果の多くは感情機能に関わるものであり、拠点として特に力を入れて推進したものである。これらの研究成果をとりまとめ、京都大学学術出版会より「感情科学」と題した書籍として出版する(7月出版予定)。

4) 事業推進担当者相互の有機的連携

心の進化と発達、作業記憶、抑制過程、文化と認知・感情等について、専門領域の異なる事業推進担当者間の共同研究や交流的会合は日常的におこなわれた。特に力を入れたのは、中間評価で弱さが指摘された基礎系・臨床系の融合策の強化である。その目的のため、上述の複数の課題を推進し、大きな成果を挙げた。拠点リーダー編集の書籍「感情科学」においても、基礎系と臨床系の研究者のみならず、学外のロボット工学や感性情報処理の専門家を交えた討論会をおこない、将来の課題を論じ合った。その成果は上記書籍にまとめられている。

5) 国際競争力ある大学づくりへの貢献度

本拠点は、心に関する総合的研究と広い視野を持った人材の育成により、国際競争力ある大学作りに貢献してきたと自負している。次項に述べる出版物は質量ともに国際的に誇れるものであるし、若手研究者の高度な活動、多数行われている国際共同研究も、京都大学の国際競争力の向上に寄与していると考えている。

6) 国内外に向けた情報発信

国内に向けては、40冊を超える和文の著編書、10冊の訳書、100編の和文原著論文、200編を超える総説が既刊あるいは印刷中であり、情報発信は高度なレベルにあると考えている。特に拠点として企画した「感情科学」は、これからの「こころ」研究の1つの指針を提供するものである。また京都大学学術出版会から刊行中の叢書「心の宇宙」は、既刊4、印刷中2、執筆中7冊を数え、本拠点の成果の一般向け発信として重要な位置づけを与えられるものである。

国外に向けては、一流国際誌への約250本の原著論文と、既刊2、印刷中5、企画中2冊の英文書籍により、十分な学術的発信をおこなったと考えている。また平成15年度には、米国ミシガン大学において京都大学シンポジウムを本拠点が中心となって実施し、京都大学心理学連合の力量を示すことができた。このシンポジウムをもとに、外国人2名、日本人1名の著名研究者

に外部評価を依頼した(18年度のものとは別件)。いずれの評価者からも極めて高い評価を受けた。

7) 拠点形成費等補助金の使途について(拠点形成のため効果的に使用されたか)

補助金は、研究の実施に必要な諸経費の他、種々のプロジェクトを通じた学内外との共同研究、とりわけ国際共同研究や、若手人材の育成(9- (2)参照)に役立てられている。

従来も個人レベルでは多角的な国際共同研究がおこなわれてきたが、本補助金を、海外の有力拠点との長期的協力関係の構築に役立てたことにより、研究活動全体を広く、かつ深くできた。特にミシガン大学とは長期的共同研究体制を確立し、具体的共同研究が複数走っている。18年度には、ランカスター大学とも同様の研究協力態勢を確立した。特定機関以外の研究者との自由な共同研究も積極的に支援し、発展させた。こうした研究活動の高度化には、研究成果の発信及び研究交流の場として設定された国際シンポジウムや国際ワークショップが大きな役割を果たした。実践活動の面でも、医療機関や司法機関との研究員の相互派遣と合同事例研究会による持続的な協力関係を構築した。

今後の展望

過去5年間の高度な研究教育活動、とりわけ国際的研究発信の飛躍的増加により、本拠点の国際的認知度、国際的評価はさらに高まったと考えている。自主的に実施した外部評価の結果も、これを裏付けている。

事業期間終了後も、本プログラムの補助により達成した国際的拠点としての地位を一層高めるべく努力を続けていきたい。京都大学心理学連合としての活動を維持し、共通化したカリキュラム等を有効に活用して、視野の広い後継者の育成を続けていきたい。継続・発展課題としてのグローバルCOEプログラムの採択を目指し、京都大学を世界中の心理学研究者が集まる拠点へと、さらに発展させたい。

その他(世界的な研究教育拠点の形成が学内外に与えた影響度)

学内措置と文科省並びに民間の支援により、「こころの未来研究センター」が平成19年4月1日に設置された。本センターは、心理学、社会学、宗教学などの視点を統合して、心のありようの解明とその健全な育成を目指し、今日的な心の諸問題の解決を指向する基礎研究拠点であり、学内外から高い注目を受けている。これは本COE拠点の大きな成果と位置づけられるものである。本拠点の事業推進担当者が中心となって運営しており、センター長も、事業推進担当者の1人がこれを務めることとなった。

21世紀COEプログラム 平成14年度採択拠点事業結果報告書

機 関 名	京都大学	拠点番号	D10
拠点のプログラム名称	心の働きの総合的研究教育拠点		
1．研究活動実績			
この拠点形成計画に関連した主な発表論文名・著書名【公表】			
・事業推進担当者（拠点リーダーを含む）が事業実施期間中に既に発表したこの拠点形成計画に関連した主な論文等（著書、公刊論文、学術雑誌、その他当該プログラムにおいて公刊したもの） ・本拠点形成計画の成果で、ディスカッション・ペーパー、Web等の形式で公開されているものなど速報性のあるもの 著者名（全員）、論文名、著書名、学会誌名、巻(号)、最初と最後の頁、発表年（西暦）の順に記入 波下線（ ）：拠点からコピーが提出されている論文 下線（ ）：拠点を形成する専攻等に所属し、拠点の研究活動に参加している博士課程後期学生 < 著者アルファベット順 / 年代順に並べた >			
著書			
藤田和生『動物たちのゆたかな心(叢書「心の宇宙」4)』京都大学学術出版会, 2007.			
藤田和生(編)『感情科学』京都大学学術出版会, 2007 (印刷中).			
Fujita, K., & Itakura, S. (eds.)『Diversity of cognition: Evolution, development, domestication, and pathology』Kyoto University Press, 2006.			
船橋新太郎『前頭葉の謎を解く(叢書「心の宇宙」1)』京都大学学術出版会, 2005			
Funahashi, S. (ed.)『Representation and brain』Springer-Verlag, 2007 (in press).			
東山紘久・伊藤良子(編)『遊戯療法と子どもの今』創元社, 2005.			
板倉昭二『「私」はいつ生まれるか』ちくま新書, 2006.			
板倉昭二『成り立つ心(叢書「心の宇宙」5)』京都大学学術出版会, 2007 (印刷中).			
子安増生(編)『芸術心理学の新しいかたち』誠信書房, 2006.			
桑原知子・倉光修(編)『カウンセリング・ガイドブック』岩波書店, 2006			
Osaka, N., Logie, R., & D'Esposito, M. (eds.)『The cognitive neuroscience of working memory: Behavioural and neural correlates』Oxford University Press, 2007 (in press).			
Osaka, N., Rentschler, I., & Biederman, I. (Eds.)『Object recognition, attention & action』Springer-Verlag, 2007 (in press)			
櫻井芳雄『脳の情報表現を見る(叢書「心の宇宙」6)』京都大学学術出版会, 2007 (印刷中).			
杉万俊夫『コミュニティのグループ・ダイナミックス(叢書「心の宇宙」2)』京都大学学術出版会, 2006			
Sugiman, T., Gergen, K., Wagner, W., & Yamada, Y. (eds.)『Meaning in action』Springer-Verlag, 2007 (in press)			
やまだようこ『喪失の語り - 生成のライフストーリー』新曜社, 2007.			
論文（査読つき学術誌掲載分のみ記載）			
Ashida, H. 'Action-specific extrapolation of target motion in human visual system.'『Neuropsychologia』42, 1515-1524, 2004.			
Ashida, H., Kitaoka, A., & Sakurai, K. 'A new variant of the Ouchi illusion reveals Fourier-component-based processing.'『Perception』34, 381-390, 2005.			
Ashida, H., Lingnau, A., Wall, M. B., & Smith, A. T. 'fMRI adaptation reveals separate mechanisms for first-order and second-order motion.'『Journal of Neurophysiology』97(2), 1319-25, 2007.			
Callaghan, T., Rochat, P., Lillard, A., Claux, M. L., Odden, H., Itakura, S., Tampanya, S., & Singh, S. 'Synchrony in the onset of mental state reasoning: Evidence from 5 cultures.'『Psychological Science』16, 378-384, 2005.			
Fujita, K., & Giersch, A. 'What perceptual rules do capuchin monkeys (<i>Cebus apella</i>) follow in completing partly occluded figures?'『Journal of Experimental Psychology: Animal Behavior Processes』31(4), 387-398, 2005.			
Funahashi, S. 'Prefrontal cortex and working memory processes.'『Neuroscience』139, 251-261, 2006.			
Funahashi, S., Takeda, K., & Watanabe, Y. 'Neural mechanisms of spatial working memory: contributions of the dorsolateral prefrontal cortex and the thalamic mediodorsal nucleus.'『Cognitive, Affective, and behavioral Neuroscience』4, 409-420, 2004.			
Hattori, Y., Kuroshima, H., & Fujita, K. 'Cooperative problem solving by tufted capuchin monkeys (<i>Cebus apella</i>): Spontaneous division of labor, communication, and reciprocal altruism.'『Journal of Comparative Psychology』119(3), 335-342, 2005.			
Imaruoka, T., Saiki, J., & Miyauchi, S. 'Maintaining coherence of dynamic objects requires coordination of neural systems extended from anterior frontal to posterior parietal brain cortices.'『NeuroImage』26, 277-284, 2005.			
Itakura, S. 'Gaze following and joint visual attention in nonhuman animals.'『Japanese Psychological Research』46, 216-226, 2004.			
Kitayama, S., Duffy, S., Kawamura, T., & Larsen, J. T. 'A cultural look at New Look: Perceiving an object and its context in two cultures.'『Psychological Science』14, 201-206, 2003.			
Kitayama, S., & Uchida, Y. 'Explicit self-criticism and implicit self-regard: Evaluating self and friend in two cultures.'『Journal of Experimental Social Psychology』39, 476-482, 2003.			

- Kochiyama, T., Morita, T., Okada, T., Yonekura, Y., Matsumura, M., & Sadato, N. 'Removing the effects of task-related motion using independent-component analysis.' *NeuroImage* 25, 802-814, 2005.
- Kojima, T., & Kusumi, T. 'The effect of the extra object on the linguistic apprehension of spatial relationship between two objects.' *Spatial Cognition and Computation* 6, 145-160, 2006.
- Komeda, H., & Kusumi, T. 'The effect of a protagonists' emotional shift on situation model construction.' *Memory & Cognition* 34(7), 1548-1556, 2006.
- Kuriyama, N., Yamagishi, K., & Kusumi, T. 'Effects of instructions and representation on mathematical problem solving.' *Psychological Reports* 93, 603-609, 2003.
- 子安増生 「幼児教育の現場におけるパーティシペーション」『心理学評論』 49, 419-430, 2006.
- Maehara, Y., & Saito, S. 'The relationship between processing and storage in working memory span: Not two sides of the same coin.' *Journal of Memory and Language* 56, 212-228, 2007.
- Matsumura, M., Sadato, N., Kochiyama, T., Nakamura, S., Naito, E., Matsunami, K., Kawashima, R., Fukuda, H., & Yonekura, Y. 'Role of the cerebellum in implicit motor skill learning: a PET study.' *Brain Research Bulletin* 63, 471-483, 2004.
- Matsuo, M., & Kusumi, T. 'Salesperson's procedural knowledge, experience and performance: An empirical study in Japan.' *European Journal of Marketing* 36(7&8), 840-854, 2002.
- Morita, A., & Saito, S. 'The homophone effect in semantic access tasks using Kanji words: Its relation to the articulatory suppression effect.' *Quarterly Journal of Experimental Psychology* 60, 581-600, 2007.
- Naito, E., & Ehrsson, H. H. 'Somatic sensation of hand-object interactive movement is associated with activity in the left inferior parietal cortex.' *Journal of Neuroscience* 26, 3783-3790, 2006.
- Naito, E. 'Sensing limb movements in the motor cortex: How humans sense limb movements.' *Neuroscientist* 10, 73-82, 2004.
- Nakayachi, K., & Watabe, M. 'Restoring trustworthiness after adverse events: The signaling effects of voluntary "hostage posting" on trust.' *Organizational Behavior and Human Decision Processes* 97, 1-17, 2005.
- Osaka, N., Osaka, M., Morishita, M., Kondo, H., Fukuyama, H., & Shibasaki, H. 'The neural basis of executive function in working memory: An fMRI study based on individual differences.' *NeuroImage* 21, 623-631, 2004.
- Osaka, N., Osaka, M., Morishita, M., Kondo, H., Fukuyama, H., & Shibasaki, H. 'Word expressing pain activates anterior cingulate cortex in the human brain: An fMRI study.' *Behavioral Brain Research* 153, 123-127, 2004.
- Osaka, N., & Osaka, M. 'Striatal reward areas activated by implicit laughter induced by mimic words in humans.' *NeuroReport* 16, 1621-1624, 2005.
- Otani, H., Kusumi, T., Kato, K., Matsuda, K., Kern, R. P., Widner, R. Jr., & Ohta, N. 'Remembering a nuclear accident in Japan: Did it trigger flashbulb memories?' *Memory* 13(1), 6 - 20, 2005.
- Saiki, J. 'Feature binding in object-file representations of multiple moving items.' *Journal of Vision* 3, 6-21, 2003.
- Saiki, J. 'Spatiotemporal characteristics of dynamic feature binding in visual working memory.' *Vision Research* 43, 2107-2123, 2003.
- Saiki, J., Koike, T., Takahashi, K., & Inoue, T. 'Visual search asymmetry with uncertain targets.' *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance* 31, 1274-1287, 2005.
- Saiki, J., & Miyatsuji, H. 'Feature binding in visual working memory evaluated by type-identification paradigm.' *Cognition* 102, 49-83, 2007.
- Saito, S., & Miyake, A. 'On the nature of forgetting and the processing-storage relationship in reading span performance.' *Journal of Memory and Language* 50, 425-443, 2004.
- Saito, S., & Baddeley, A. D. 'Irrelevant sound disrupts speech production: Exploring the relationship between short-term memory and experimentally induced slips of the tongue.' *Quarterly Journal of Experimental Psychology* 57A, 1309-1340, 2004.
- Sakurai, Y., & Takahashi, S. 'Dynamic synchrony of firing in the monkey prefrontal cortex during working memory tasks.' *Journal of Neuroscience* 26, 10141-10153, 2006.
- Sakurai, Y., Takahashi, S., & Inoue, M. 'Stimulus duration in working memory is represented by neuronal activity in the monkey prefrontal cortex.' *European Journal of Neuroscience* 20, 1069-1080, 2004.
- Sato, W., & Yoshikawa, S. 'Spontaneous facial mimicry in response to dynamic facial expressions.' *Cognition*, 2007 (in press).
- Sogo, H., & Osaka, N. 'Kanizsa figure does not defend against saccadic compression of visual space.' *Vision Research* 45, 301-309, 2005.
- Sugiman, T. 'Theory in the context of collaborative inquiry.' *Theory & Psychology* 16, 311-325, 2006.
- 杉万俊夫 「質的方法の先鋭化とアクションリサーチ」『心理学評論』 49(3), 551-561, 2007.
- Takahashi, S., Anzai, Y., & Sakurai, Y. 'Automatic sorting for multi-neuronal activity recorded with tetrodes in the presence of overlapping spikes.' *Journal of Neurophysiology* 89, 2245-2258, 2003.
- Takahashi, S. & Sakurai, Y. 'Real-time and automatic sorting of multi-neuronal activity for sub-millisecond interactions in vivo.' *Neuroscience* 134, 301-315, 2005.
- Watanabe, K. & Funahashi, S. 'Prefrontal delay-period activity reflects decision process of a saccade direction during a free-choice ODR task.' *Cerebral Cortex*, in press.
- やまだようこ 「質的心理学とナラティブ研究の基礎概念 - ナラティブ・ターンと物語的自己」『心理学評論』 49(3) 436-463, 2006.
- Yamada, Y. & Kato, Y. 'Images of circular time and spiral repetition: The generative life cycle model.' *Culture & Psychology* 12(2), 143-160, 2006.
- Yoshikawa, S., & Sato, W. 'Enhanced perceptual, emotional, and motor processing in response to dynamic facial expressions of emotion.' *Japanese Psychological Research* 48, 213-222, 2006.
- Yuzawa, M., & Saito, S. 'The role of prosody and long-term phonological knowledge in Japanese children's nonword repetition performance.' *Cognitive Development* 21, 146-157, 2006.

国際会議等の開催状況【公表】

(事業実施期間中に開催した主な国際会議等の開催時期・場所、会議等の名称、参加人数(うち外国人参加者数)、主な招待講演者(3名程度))

- 2002年12月14日～15日、京都大学人間環境学研究所、International Symposium “Socio-Cultural Foundations of Cognition”、参加者約160名(外国人約15名)、主な招待講演者: David Sherman, UCLA, USA; Richard E. Nisbett, University of Michigan, USA.; Claude M. Steele, Stanford University, USA
- 2003年7月26日～27日、京都大学文学研究科、The 1st International Workshop for Young Psychologists (IWYP) on Evolution and Development of Cognition、参加者約60名(外国人約10名)、主な招待講演者: Katherine A. Leighty, University of Georgia, USA; Dalila Bovet, Université Paris X, France; Emilie Genty, CEPE UPR/CNRS 9010, France
- 2003年9月26日～27日、京都大学芝蘭会館、International Symposium “Diversity of Cognition: Evolution, Development, Domestication, and Pathology”、参加者約120名(外国人約15名)、主な招待講演者: Edward Wasserman, University of Iowa, USA; Anne Giersch, University of Louis Pasteur, France; Robert Jackson, University of Canterbury, New Zealand; Ádám Miklósi, Eötvös Loránd University, Hungary
- 2003年12月6日～7日、ミシガン大学心理学部、Kyoto University International Symposium “Self, Cognition, and Emotion: Toward the Future of Psychological Research” (The First Kyoto-Michigan Collaboration in Psychology)、参加者約200名(外国人約160名)、主な招待講演者: John Jonides, University of Michigan, USA; Robert B. Zajonc, Stanford University, USA; Henry Wellman, University of Michigan, USA
- 2004年4月24日～25日、京都大学時計台記念館、International Symposium “Self and Society” (The 2nd Kyoto-Michigan Collaboration in Psychology)、参加者約150名(外国人約10名)、主な招待講演者: Patricia Reuter-Lorenz, University of Michigan, USA; David Meyer, University of Michigan, USA; Richard Gonzalez, University of Michigan, USA
- 2004年8月4日～6日、京都大学時計台記念館、International Workshop on Object Recognition, Attention and Action、参加者約150名(外国人約15名)、主な招待講演者: Irving Biederman, University of South California, USA; Heinrich Bulthoff, Max Planck Institute, Germany; Bosco Tjan, University of South California, USA
- 2004年8月17日～20日、京都国際会議場、The 2nd International Working Memory Conference、参加者約194名(外国人約40名)、主な招待講演者: Alan Baddeley, University of York, UK; Akira Miyake, University of Colorado at Boulder, USA; Michael Petrides, McGill University, Canada
- 2004年11月13日～14日、京都大学時計台記念館、The 2nd International Workshop for Young Psychologists (IWYP) on Evolution and Development of Cognition、参加者約120名(外国人約15名)、主な招待講演者: Zsófia Virányi, Eötvös Loránd University, Hungary; Sarah F. Brosnan, Emory University, USA; Kathelijne Koops, University of Utrecht, The Netherlands
- 2005年1月28日～30日、京都大学時計台記念館、International Symposium “New Perspectives in Affective Science”、参加者約160名(外国人約15名)、主な招待講演者: Ross Buck, University of Connecticut, USA; Randolph Nesse, University of Michigan, USA; Peter Widmer, Psychotherapist, Switzerland; Carolyn Saarni, Sonoma State University, USA
- 2005年10月22日～23日、京都大学文学研究科、The 3rd International Workshop for Young Psychologists (IWYP) on Evolution and Development of Cognition、参加者約140名(外国人約10名)、主な招待講演者: Valerie Kuhlmeier, Queens University, Canada; Victoria Southgate, University of London, UK; Juliane Kaminski, Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology, Germany
- 2006年1月14日～15日、京都大学時計台記念館、International Symposium on Inhibitory Processes in the Mind、参加者約102名(外国人約10名)、主な招待講演者: Michael Anderson, University of Oregon, USA; Michael Anderson, University of Oregon, USA; Philip D. Zelazo, University of Toronto, Canada
- 2006年9月2日～3日、京大会館、The 4th International Workshop for Young Psychologists (IWYP) on Evolution and Development of Cognition、参加者約100名(外国人約10名)、主な招待講演者: Tricia Striano, Max Planck Institute for Human Cognitive and Brain Sciences, Germany; Kimberley J. Hockings, University of Stirling, UK; Joanna M. Dally, University of Cambridge, UK
- 2006年10月25日～26日、ランカスター大学心理学部、Kyoto-Lancaster Joint International Symposia、参加者約100名(外国人約85名)、主な招待講演者: Peter Walker, Lancaster University, UK; Kate Cain, Lancaster University, UK; Jacqui Harrison, Lancaster University, UK

2. 教育活動実績【公表】

博士課程等若手研究者の人材育成プログラムなど特色ある教育取組等についての、各取組の対象（選抜するものであればその方法を含む）、実施時期、具体的内容

国際大学院生交流経費（平成14年度創設）

対象： 派遣 - 京都大学の心理学連合関連部局大学院在籍の大学院生

招へい - 海外の大学等研究機関に在籍する大学院生

目的： 派遣 - 海外の大学等研究機関において本拠点形成プログラムの研究プロジェクトに関連する研究を行おうとする者に対し、旅費及び最大3ヶ月間の滞在費を支給する。

招へい - 京都大学心理学連合の研究室において本拠点形成プログラムの研究プロジェクトに関連する研究を行おうとする者に対し、旅費及び最大3ヶ月間の滞在費を支給する。

選考： 公募による。指導教官あるいは受け入れ対応教官を通じて研究題目ならびに研究計画を提出し、書類選考。できるだけ多くの大学院生の派遣／招へいを実現するため、選抜はおこなわず、応募者多数の場合には、支給金額の調整をおこなった。

実績： 14年度：30万円～80万円、総額380万円（7名）

15年度：20万円～80万円、総額482万円（9名）

16年度：20万円～80万円、総額429万円（9名）

17年度：30万円～70万円、総額483万円（9名）

18年度：20万円～70万円、総額675万円（18名）

大学院生養成プログラム研究費制度（平成15年度創設）

対象： 京都大学の心理学連合関連部局大学院博士後期課程在籍の大学院生。ただし、日本学術振興会特別研究員など、類似の補助金を受けている者は対象としない。

目的： 本拠点形成プログラムの研究プロジェクトに関連する優れた研究計画に対し、科学研究費に準ずる形式で大学院生の個別研究プロジェクトを支援するもの。

選考： 公募。研究業績ならびに研究計画を記載した申請書をもとに、5 - 6名からなる選考委員会において、書類選考。

実績： 15年度 63万円～78万円、総額498.6万円（8名）

16年度 35万円～65万円、総額497.7万円（10名）

17年度 40万円～50万円、総額502.8万円（11名）

18年度 29.5万円～50万円、総額442.8万円（10名）

21世紀COEプログラム委員会における事後評価結果

(総括評価)

設定された目的はある程度達成された

(コメント)

研究教育拠点形成計画全体については、参加した各事業推進担当者の研究実績が上がったことは評価できるが、当該プログラムが目指していた「心の働きの総合的研究」としての新たな研究分野の創成と学術的知見の総合化については、いくつかの萌芽が生まれつつあるものの、「心の働きの総合的研究」として全体を統合する研究領域の創成に向けての具体的な方策は十分であったとは言えず、その結果、「心の働きの総合的研究」領域の創出には至っていない。

人材育成面では、多様な試みが行われ、大学院生の学術論文数、国内外の学会発表数などでかなりの成果が上がっている。

研究活動面では、叢書「心の宇宙」の刊行は、本プログラムの成果を一般向けに発信するものであり、本プログラムのコンセプトの一部を具体化するものとして評価できる。また、①「共感的対話」における相互作用性に関する多角的研究、②遺伝情報と意思決定に関する臨床心理学的・社会心理学的・認知心理学的研究、③ADHD（注意欠陥／多動性障害）を克服する方策に関する研究などにより、領域間の連携が部分的にでも図られたことは評価できる。それらの成果を「感情科学」としてまとめようとする努力も評価できるが、「心の働きの総合的研究」としての十分な成果を生み出すには至っていない。

補助事業の終了後の持続的な展開については、平成19年4月に「こころの未来研究センター」が設置され、本プログラムの研究の持続・推進が図られており、今後の発展が期待されるが、その活動内容や資金的支援計画等の具体化が望まれる。

事後評価結果に対する意見申立て及び対応について

意見申立ての内容	意見申立てに対する対応
【申立て箇所】 総合評価： <u>設定された目的はある程度達成された</u> コメント：<u>当該プログラムが目指していた「心の働きの総合的研究」としての新たな研究分野の創成と学術的知見の総合化については、いくつかの萌芽が生まれつつあるものの、全体を統合する研究領域の創成に向けての具体的な方策は十分であったとは言えず、その結果、新しい総合領域の創出には至っていない。</u> ．．． それらの成果を「感情科学」としてまとめようとする努力も評価できるが、<u>「総合的研究」としての十分な成果を生み出すには至っていない。</u> 【意見及び理由】 我々が目指した「心の働きの総合的研究」とは、『実験から臨床に渡る多様なアプローチにより、相互に連携しつつこの問題空間における研究を推進し、国際的学術論文や書籍の公刊、国際シンポジウム、研究者や大学院生の相互国際交流などを通じ、心理学の世界的研究拠点として、我々はその成果を発信する。またその成果を踏まえた臨床実践活動を通じて、広く社会に資する貢献を目指す（事業結果報告書様式2の2ページ）』ことであった。なぜ「新しい総合領域の創出」などという言葉が審査者の評価基準となっているのかが理解できない。もとよりいかなる学問においても「新しい総合領域の創出」	【対応】 変更しない。 以下の通り修正する。 当該プログラムが目指していた「心の働きの総合的研究」としての新たな研究分野の創成と学術的知見の総合化については、いくつかの萌芽が生まれつつあるものの、<u>「心の働きの総合的研究」として全体を統合する研究領域の創成に向けての具体的な方策は十分であったとは言えず、その結果、新しい「心の働きの総合的研究」領域の創出には至っていない。</u> 以下の通り修正する。 それらの成果を「感情科学」としてまとめようとする努力も評価できるが、<u>「心の働きの総合的研究」としての十分な成果を生み出すには至っていない。</u> 【理由】 前段について、総括評価は計画の着実な実施のみから判断しておらず、中間評価の状況等も踏まえ、部会として評価項目全体を通じて慎重に審議を行い、判断したものであることから、変更しない。 中段については、心の働きの総合的研究教育拠点形成に向けた事業推進担当者相互の連携等が十分に見受けられないことについて指摘したものであるが、申立てを踏まえ、より趣旨が明確となるよう、修正した。 後段についても、同様に申立てを踏まえ、より趣旨が明確となるよう、修正した。

などということが5年間でできようはずはなく、当初にそうした目標を掲げていたとすれば、我々の拠点は目標の修正を迫られていたであろう。

事後評価コメントにも記載され、評価されているとおり、我々は実際に我々が掲げた目標通りに事業を進めてきた。そして我々自身も驚いているほど高いレベルで目標を達成したのである。多様な研究成果を国際誌に原著論文として発信し、英文専門書籍としてまとめ出版した。「感情科学」という新たな研究領域を創成し、書籍として世に問うた。一般向けにも叢書の発行を開始し、継続している。教員の活動レベルは飛躍的に高まり、査読論文数は事業開始初年度の約2.5倍になった。大学院生の査読論文数も同じく事業開始時の2.5倍に達し、学会発表数は約3倍に達するなど（事業結果報告書様式2の5ページ）、人材育成面でも大きな成果を挙げた。中間評価では実験系・臨床系の融合が不十分であると指摘されたが、それに対してはコメントでも評価されているように具体的な複数の融合研究として応えたのである。

当初の目標を高度に達成し、中間評価にも十分に応えたこうした我々の誇るべき活動実績が、なぜ「目標はある程度達成された」というような低い評価に甘んじなければならないのか我々は理解できない。このような具体的な成果を通じてこそ、心の働きの総合的理解が可能になるのである。我々はそれを実践してきたのである。本最終総合評価は、我々の自己評価に比べて、また平成18年度に自主的に実施した外部評価に比べても著しく低く、不当である。総合評価の見直しを強く求める。